

二次元ぷち文庫

表紙イラスト…火浦R
岡下誠



奈々の
学園ライフ
外伝

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『奈々の学園ライフ外伝』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリーム文庫『奈々の学園ライフ お姉さまをゲットせよ』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



奈々の 学園ライフ 外伝

岡下誠
表紙／火浦R

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

まいしま な な
舞島 奈々

引っ込み思案な性格の少女。百合とお近づきになるために生徒会書記になる。

しらひめ ゆ り
白姫 百合

学園の生徒会長。高貴な令嬢で、凛々しい姿は後輩たちの憧れの的。

きりはら すず ね
桐原 鈴音

奈々のクラスメイトで親友。武道に秀でた大和撫子。長刀部所属。

あさひ な あ り さ
朝比奈 亜里紗

鈴音の先輩かつお姉さまで、百合の幼馴染み。

「奈々、来賓名簿はいただいてある？」

「はい、お姉さま。教頭先生から頂戴してあります」

舞島奈々は、幼顔をほんのりと赤らめながら答えた。お姉さまからお声をかけていただくと、今でもひとりでに顔が上気してしまうのだ。

ここは貞聖女子学園の生徒会室。

生徒会の役員たちは、卒業式の準備に追われている。

もともとは引っ込み思案だった奈々が、一大決心をして生徒会役員に立候補してから、はや数ヶ月がたった。

遠くから眺めることしかできなかった百合さまとお近づきになり、一緒に仕事をさせていただく。それだけでも、奈々にとっては夢のような日々である。

しかも、姉妹の契りまでしていただいたのだ。

百合さまと。

貞聖女子の一年生ならば誰もが憧れているであろう白姫百合さまと、姉妹の契りを交わしたのだ。

契りの儀式を思い出しただけで、奈々の身体は微熱を帯びてしまう。

口づけを交わし、秘めやかな肌を百合さまの手でまさぐられた。そして奈々は、純潔の証を百合さまに捧げたのだ。憧れ続けていた百合さまの手で、女にしていたのだ。

現在、白姫百合さまのことを『お姉さま』と呼べるのは、貞聖女子学園ではただ一人、奈々だけである。

奈々は、敬愛してやまないお姉さまのお顔をそつと見た。麗しく、りりしいお顔。単に美しいだけでなく、気品があふれている。

「来賓の方々のご案内は一年生の仕事よ。粗相のないようにね」
「はい……」

こうして仕事の指示をいただいているだけでさえ、奈々の胸は高鳴り、顔が火照ってしまふ。

しかし、奈々の幼顔が赤らんでいるのは、お姉さまとの会話で胸が高鳴ったからだけではない。

別の原因もあるのだ。

優美で気高い白姫百合さまは、他の生徒たちが知らない別の一面をも合わせ持っている。ごく親しい間柄の人たちしか知らない秘められた一面……。

妹となった奈々は、それを誰よりも思い知らされることとなった。

（ああああ……お姉さま……お許しを……）

奈々は、もじもじと太腿をこすり合わせている。まるで、おしっこをこらえているかのような仕草だ。

校則通りのスカート丈を守っている奈々だが、スカートの中に穿いているのは、貞聖女子の生徒にふさわしからぬ下着である。そもそも、下着の名に値するかどうかすら疑わしい。奈々の股間に張りついているのは布地でさえない。縄である。

お姉さまの命令で股縄をかけられているのだ。躰けのためという名目で。ポニーテールの髪型も、その根本を結んでいるレースのリボンも、スカートの丈も、全て校則に従っている。

しかし、スカートの中に穿いているのは淫らな縄下着。女唇の合わせ目には縄が喰い込んでいる。

お姉さまの躰けはそれだけにとどまらない。

初めてを捧げた女肉穴に、マユの形をした淫玩具を埋め込まれていた。

秘めやかな肉穴にそのような異物を入れられるだけでさえ、奈々にとってはこの上なく恥ずかしい。

しかもその淫玩具は、小刻みな振動で奈々の女陰を責め立てるのだ。振動の有無、強弱は、お姉さまの手の中にある小型リモコンによって操作されている。お姉さまの意のままに蠢く淫まゆ玉で、奈々は恥辱と快楽を味わわされていた。

生徒会室にいる今も、淫玩具は微弱な振動を続けている。卒業式に向けての準備をしている最中も、奈々はひそかに快感をこらえていたのだ。

淫らな蠢きにさいなまれて、太腿同士をもじもじとこすり合わせずにはいられない。

「どうしたの、奈々？ おしつこでもしたいのかしら？」

微笑とともにお姉さまはとがめる。

お姉さまは、ご自分で淫器具を操作しておきながら、素知らぬ顔をしていた。

「い、いえ……。そういうわけでは……」

女陰のうずきをこらえて内股になりつつ、奈々はついつい恨めしげな表情をしてしまう。お姉さまにだけしかわからないよう、ほんのかすかに頬をふくらませただけだが。

「あなたにもいろいろとやってもらうことがあるんだから、しっかりと頼むわよ」

お姉さまは、どこまでも気高い表情をしていらっしやる。

「は……はい……」

麗しのお顔に奈々が見とれていたその時、女肉穴にくわえ込まされた淫玩具が、蠢きを強めた。

（ひあああ……あああ……ああん……。お、お姉さま……。そんな……）

細かな震えで秘粘膜をさいなまれ、快楽をかき立てられる。快楽のあまり脚に力を入れていられなくなり、椅子に座り込んでしまう。

お姉さまは、別の案件を処理するために、副会長のもとへと行ってしまわれた。

だが、淫器具は相変わらず淫靡いんぴな振動をしている。秘めやかな女肉穴は、淫靡な蠢きに

さらされて快楽に悶えていた。ひくひくと収縮して、喜びの汁をもらしてしまふ。

(んああ……ああ……。こ……これでは……仕事……できません……)

書類に向かっててもペンは止まったままだ。

うずくまって、快感に身をわななかせている。

朝から股縄を穿かされ、淫器具を埋め込まれ、奈々の身体は高ぶり通しであつた。

歩いただけでも、秘めやかな粘膜は縄でこすられる。一步ごとに女唇を刺激され、恥ずかしさと快感に見舞われた。

女肉穴に埋め込まれた淫器具は、気まぐれな蠢きで奈々の肉体を責める。いつ振動し始めるかもわからず、授業中であろうと仕事であろうとおかまいなしだ。どんな蠢きをするのかもお姉さまの気分次第である。

奈々は、いつも股間のことを考えていた。

とともに、淫靡な躰けをなさつたお姉さまのことが頭から離れない。学年が違い、教室が違おうとも、お姉さまが身近にいるかのように感じられた。

(お姉さま……ああ……ああん……。お願いですから……。あそこ……。お許しください……)

ぴつたりと閉じ合わせた太腿の付け根では、淫器具の振動にさいなまれて女陰が歓喜に悶えている。

奈々にとって、淫器具はお姉さまの指そのものだ。直接に触れられてはいなくても、女肉穴に埋め込まれた淫器具を通して奈々は舐けをされているのである。

（んあああ……お姉さま……お姉さま……）

幼顔を紅潮させつつ奈々は書類に向かった。太腿同士をもじもじとすり合わせ、縄の喰い込む女花肉から喜びの汁を滴らせながら。

「奈々。あなただけ作業が遅れているわよ」

「はい……申し訳ありません……」

他の生徒会役員たちが帰った後も、奈々は居残り作業を命じられていた。

それを命じたのは、仕事を遅らせた張本人であるお姉さま。

（あんなことをされたら……誰だって仕事が手につきません……）

上目づかいでお姉さまを見つめながら、太腿と太腿をこすり合わせた。

一見すると校則通りの制服姿をしている奈々だが、スカートの中は貞聖女子の教育理念からは大きく逸脱した有様となっている。

剥き出しの股間に縄下着を穿かされ、しかも淫らな玩具を女肉穴に埋め込まれているのだ。

その淫玩具は、お姉さまのリモコン操作で振動する。細かな蠢きで奈々をじらしたかと

思えば、いきなり激しい振動で責め立てた。

お姉さまの意のままに蠢く淫玩具は、奈々にとってお姉さまの指そのものである。仕事をしている間中、強弱をつけた振動にさいなまれて、よがり啼なきをこらえるのがやつとであつた。股縄が喰い込んだ女陰は発情の汁で潤みきっており、喜びのあまりひくひくと収縮している。

二人きりの生徒会室で、お姉さまは優美かつ淫靡な笑みを浮かべていらした。

「縄下着を穿いたくらいで集中力を乱すとは、私の妹にあるまじき失態よ。躰けのし直しが必要ね」

麗しのお顔にたたえられた微笑が、なおのこと淫らなぬめりを帯びる。

奈々は、おびえて身を縮こまらせた。

「服を脱ぎなさい。裸になるのよ」

お姉さまのお声はあくまでも穏やかだが、あらがいがたい響きがある。

ましてや、妹である奈々にとって、お姉さまの命令は絶対だ。たとえそれがどんなに恥ずかしくて淫らな命令であろうとも。

「は……はい……」

奈々はブレザーを脱ぎ、スカートを脚から抜く。恥ずかしさに震える指でブラウスのボタンを外し、それも脱いだ。

お姉さまの前で裸身をさらすのは初めてではなく、躰けの一環としてそれこそ何回となくさせられてきた。

それでも恥ずかしさに慣れるということではなく、裸身になることを命じられるたびに新たな恥ずかしさを味わわれる。

（あああ……お姉さまが……ご覧になっている……）

美しい姿勢で椅子にかけたお姉さまは、かすかな笑みに口元をゆがめつつ、淫らがましい眼差しで妹を見ていた。恥ずかしがる奈々を見て楽しんでいるご様子だ。

敬愛してやまないお姉さまの視線にさらされながら、奈々はシャツを脱ぎ、ブラジャーを外す。

奈々が身体に着けているものといえば、ポニーテールを結ぶためのレースリボン、靴と靴下、そして女陰に喰い込む股縄だけである。

奈々は、剥き出しの乳房を両腕でかき抱き、内股になって腰を引いている。恥ずかしいところを少しでも視線から遠ざけようとしたのだ。

「ふふふ……女同士なんだから、恥ずかしがることないでしょ。胸元から腕をどかしなさい」

やわらかな声音で命じるとともに、手元のリモコンを操作する。

「んああああ……あああ……ああん……」

胸元をかき抱いたまま奈々は歓喜の喘ぎをもらした。内股になった脚をわななかせる。女陰穴に埋め込まれた淫器具が細かに振動して、腰がとろけるかのような快感をかなでられたのだ。

股縄の喰い込む女唇は、内部から淫弄されて喜びの蜜を滴らせる。

「あああ……あひっ……あんっ……。お許し……ください……」

絶え絶えの息づかいで喘ぎながら、奈々は胸元から手をどけた。女の子として恥じらうよりも、妹として姉の命令に従う。

腕の下から乳房がこぼれ出た。

幼さの残る顔立ちをしている奈々だが、乳房は豊かな実りをしている。手のひらに収めきれないほどの大きさだ。

（あああ……お姉さま……。そんなにじつとご覧にならないでください……）

薄桃色をした乳首は、奈々の発情ぶりを素直に告白して、によっこりと尖り立っている。それをお姉さまに見られているかと思うと、恥ずかしさもさることながら、秘めやかな喜びを覚えてしまうのだ。身体が高ぶり、乳首は正直な反応をしていた。

あからさまな反応をしているのは乳首だけではない。

お姉さまの視線が下に這ってゆくのを感じて、奈々はますます身体を熱くした。ねつとりとした視線が、縄がけされた股間に這いずりまわる。

（ひうう……。お姉さまに……。あそこを見られている……）

女唇を見られるのは女の子ならば誰でも恥ずかしいが、奈々にとっては特に恥ずかしい。奈々の女唇が、普通の女の子と少し違うからだ。

ぷつくらとした女肉門には、産毛の一本すら生えていない。奈々の年齢ならばそこに翳りがあつてしかるべきなのに、磨き上げたかのようになめらかな肌をさらしている。

「ふふふ……。いつ見ても、奈々のあそこは可愛らしいわ」

幼顔、豊かな乳房、無毛の女陰……。

女性らしい肉感美と、童女さながらの幼さとが、倒錯的な美となっているのだ。

「い……。言わないでください……。お姉さま……」

「無毛のあそこだと、喰い込んだ縄がことのほか映えるわね……」

女唇を觀賞しての感想まで聞かされ、恥ずかしさのあまり奈々は顔を背けた。

しかし、恥ずかしいと思う心とは裏腹に、肉体は喜びに悶えている。わずかに割れ目からはみ出た姫花卉は、発情して咲きめくれていた。お姉さまの指しか知らない女陰穴は、きゆうきゆうと収縮して熱い蜜汁をもらしている。

淫器具の蠢きに責められ、また、お姉さまの視線にさらされて、幼げな女陰は熱いうずきに見舞われていた。

「騷けの最中だというのに、こんなに濡らしているの？ 呆れたものだわ」

お姉さまからお叱りの言葉をいただいてさえ、奈々の胸は高鳴ってしまふ。

「申し訳……ありません……」

そう言いつつも、女唇のうずきにさいなまれて太腿同士をすり合わせていた。

その仕草によって股縄がずれ、女肉門の合わせ目がこすられる。包皮から剥け出た女芯を縄でこすられて、快感がかなでられた。

淫器具の振動にさいなまれて太腿をもじつかせたというよりも、縄の快感を求めてひとり遊びにふけているかのように見える。

「しっかりと躰けをし直してあげるから、覚悟をなさい」
麗しくもぬめるように淫らな微笑を浮かべるお姉さま。

「はい……」

裸に剥かれたことさえも躰けの序章に過ぎないことを思い知らされ、奈々はひそかな期待に身体を火照らせた。

奈々は、机に向かって、やり残した書類作業にいそしんでいる。

が、手の進みは遅く、一向にはかどっていない。

その原因は、奈々が座っている椅子にあった。奈々が腰かけているのは普通の椅子ではない。お姉さまの太腿なのだ。

恐れ多くもお姉さまの太腿にお尻をのせ、ふつくらとしたお胸に背をもたせかけている。

「あなたが怠けたりしないように、私がしっかりと見張っていてあげるわ」

お姉さまのささやきに耳をくすぐられ、奈々はわずかに首を縮めた。

「お……お姉さまの上にすわっているなんて……恐れ多くて……」

「ちゃんと仕事をしないと、もっと恥ずかしいお仕置きをするわよ」

お姉さまの唇で、そつと耳をついばまれる。そのくすぐったさもさることながら、ささやきかけられた内容に奈々は顔を赤らめずにはいられない。

「そ……そんな……」

奈々は体育着を身につけている。

上半身だけは。

腰から下は、靴と靴下しか着けていない。

上半身に体育シャツを身につけていながら、下半身には何も穿いていないのだ。体育シャツの裾の下に、無毛の股間があらわになっている。シャツを着ていることによって、何も穿いていない股間、剥き出しの女唇が強調されていた。

体育シャツも恥ずかしいことになっている。お姉さまは、体育シャツを着ることはお許しくださっても、ブラジャーを着けることはお許しくださらなかった。

奈々の豊かな乳房はシャツの布地を押し上げ、その丸みを克明に浮き出させている。ふ

くらみの頂にある乳首も、尖り具合までもくつきりとあらわれていた。

上半身に体育シャツを着ていることで、なまじ裸でいるよりも淫らな姿になっている。

「お仕置きは何がいいかしら……。このままの格好で校内を引きまわすのはどう？」

お姉さまの腕が腰にまわされ、優美で白い手が奈々の腹部をねつとりと這い上がってきた。

胸のふくらみをそつとすくい上げられ、やさしく揉みこねられる。

「んあああ……。あああ……。そ、そんなことをされたら……。もう学校に来られなくなってしまう……」

胸をいたずらされても、奈々にあらがうことは許されない。右手にはペンを持ち、左手で書類を押さえ、正しい姿勢で机に向かっている。正しい姿勢で机に向かいながら、淫らないたずらを甘んじて受けているのだ。

どちらの手も拘束されているわけではなく、お姉さまの手を払いのけようと思えばできないことはない。

だが、そんなことをしようものなら、本当に校内を引きまわされてしまうだろう。

「心配なくていいのよ。首輪をはめてあげるから、姉による躰けだとみんなわかってくれるわ」

「そういう問題では……」

その光景を思い描いて、奈々は身体を熱く高ぶらせた。

下半身裸で校内を引きまわされる奈々。

首輪をはめられ、そこから伸びる鎖はお姉さまの手に。

廊下をゆく女生徒たちは、奈々が体育シャツしか身につけていないことに気づいて目を見張る。ある者はひそかに、またある者はあからさまに、何も穿いていない股間に目をやる。童女のような無毛の女陰門に、好奇の視線を注ぐことだろう。

(つるつるのあそこを見られたら……私……)

身体が熱を帯びているのは、恥ずかしさのためだけではない。お姉さまの手で引きまわされるかと思うと、ひとりでに身体が熱くなってしまうのだ。

「まじめに仕事をしますから……どうか……お仕置きだけはお許しください……」

「そうすることね」

体育シャツに浮き出た尖りを、お姉さまの指先がとらえる。羽毛がかすめるかのような軽やかさでこすりまわされた。

「はう……んああ……あつ……あん……」

つぼみ

発情してふくらんだ蕾を布地越しくすぐられて、奈々は思わず喘ぎをもらしてしまう。愛撫をおねだりしているのに、くすぐったい刺激しか与えてもらえず、乳首は欲求不満に悶えていた。少しでも快感を貪ろうとして、ますます身をふくらませる。

「こんなに乳首を尖らせて……。あなた、本当にやる気があるの？」

熱い吐息を耳の穴に吹きかけられ、瑞々しい唇で耳たぶをついばまれた。

耳元のくすぐったさと、乳首のじれったさとが響きあい、奈々の女体はなおのこと発情の度合いを深めてしまうのだった。

（それは……お姉さまが……）

とは口に出せない。

「申し訳……ありません……んう……んああ……ああん……」

唇がほどけ、熱い喘ぎがこぼれ出る。

やさしくも巧みな指づかいで左右の乳首を翻弄ほんろうされ、女の喜びをかなでられた。シャツ

を隔てることによつて、指先の刺激が心地よくもくすぐったいものと変貌へんぼうする。甘美な

くすぐったさに上体がわななき、ポニーテールがかすかに揺れてしまう。

もどかしさに悶えて乳首はふくらみきり、今にもはちきれんばかりだ。快感が見えざる

お乳となり、じくじくとにじみ出る。

もし摘まれたりしごき上げられたりしたら、乳首の快感だけで気をやってしまいそうだ。

「乳首がこの様子なら、あそこも調べなければならぬわね」

「ああ……あそこを調べるのは……ご容赦を……」

奈々は太腿同士を閉じ合わせる。じゅくじゅくに潤んだ姫果実から、熱い果汁が搾り出

された。

「どうして？ 仕事に集中しているのだったら、あそこを調べられて困ることなどないはずよ」

お姉さまの熱い息吹に耳をくすぐられる。

「んあああ……。そ、それは……」

おびえる奈々の腹部を、お姉さまの手がじわじわと這い下りてきた。

「まさかとは思うけれど、濡らしてなどいないでしょうね」

やさしい口調だが、ぬめるように淫らな響きを帯びている。

無毛の股間を目指して這い下りてくる手を意識しながらも、奈々は身を強ばらせたままだ。両手は机の上に置いたまま。

お姉さまの指先が奈々の女陰をとらえる。

「んあああ……。あん……」

無毛の肉饅頭を撫でまわされ、そこに刻まれた縦割れをまさぐり上げられた。姫花びらの間を指腹でねっとりこすられる。

発情してうずき返った女陰をまさぐられ、奈々は女の喜びに悶えた。お姉さまの指先を感じて、歓喜の蜜汁をもらしてしまう。

「まあ……こんなに濡らして……」

呆れたようにおっしやるお姉さま。

「仕事中なのにあそこからお汁をもらすなんて、恥ずかしいと思わないの？」

そうおっしやりつつも、お姉さまは指の蠢きを止めてくださらない。

繊細な指づかいで乳首をくすぐられ、女陰門の合わせ目をまさぐられ、奈々の女体は官能の高ぶりに見舞われる。閉じ合わせた太腿の付け根では、産毛すら生えていない姫花肉が嬉し泣きをした。

（あひっ……あん……ああん……。お姉さまが……いたずらをなさるから……）

両手を机にやったまま、奈々は懸命になつて快感をこらえている。

しかし、お姉さまは妹の性感を知り尽くしているのだ。正確な指づかいで性感帯を弄もてあそばれ、喜びの音色をかなでられた。

書類に集中しようとしても長続きはせず、奈々は快楽に我を忘れてしまう。

「んはああ……あああ……あんっ……」

お姉さまの膝の上で、奈々はふしだらな喜びをこらえきれずにいた。

童女さながらの幼げな女陰だが、喜びにほころんで発情の蜜を滴らせている。小さな女芯は性的興奮にふくらみ、包皮から剥け出ていた。

かすめるように撫でこすられると、もどかしくじれたい快感を味わわれる。

女芯はもっと快楽を欲しがっているのだが、お姉さまは与えてくださらない。弱火の快

楽でじつくりとじらされ、奈々の肉体は官能にとろけてゆく。

(あ……ああ……もう、我慢できない……)

弱火であぶられるかのような快感に屈して、奈々はとうとう口にしてしまった。

「お……お姉さま……。どうか……じらさないでください……。お願いですから……。もつと……」

お仕置きを覚悟して淫らなおねだりをする。

じらし責めに屈した奈々の身体からは、すっかり力が抜けていた。快樂のあまりに脱力し、恐れ多くもお姉さまの胸に背中をもたせかけている。

「ふふふ……。私の妹にあるまじきふしだらさね」

お姉さまは、優美な指の先にさらなる淫靡さを込めて奈々の女芯をこすりまわした。羽で撫でるかのような指づかいで。

剥け返った女芯はなおのこと身をふくらませ、もつと激しい刺激を懇願している。膣穴はきゅうきゅうと収縮して、おねだりの汁をもらしていた。

「書類を仕上げるまではこのままよ。ご褒美が欲しかったら、仕事にいそしみなさい」
そうおっしゃる一方、お姉さまは精緻な指づかいで乳首と女芯を翻弄する。体育シャツに浮き出た尖りをこすりまわし、感じやすい蕾をいたぶりまわした。

「あぁっ……。ああ……。ああん……。そんな……。んああ……。あんっ……」

乳首も女芯も、快感に悶えてぴんぴんに尖り立ってしまった。

奈々の性感を知り尽くしたお姉さまは、絶妙な力加減で尖りを弄んだ。女芯を揉み転がして気をやる寸前にまで追いやると、一転して乳首をくすぐり始める。乳首をじらし抜いてから、再び女芯を弄ぶのだ。

「あっ……はああ……ああん……。このままでは……おかしくなってしまう……」
鼻にかかった喘ぎとともに奈々はよがり悶える。

執拗かつ淫猥な指づかいでじらされ、肌という肌が性感帯になっていた。体育シャツしか着けていない女体は、ふしだらな牝に剥き上げられてしまう。

「お姉さま……お姉さまあ……あああ……あんっ……」

奈々は、半開きになった唇で悶え啼きつつ、咲きほころんだ女花肉で蜜の涙を流していた。

生徒会室で躑けをしていたいただいた翌日。

奈々は、いささかの気だるさを覚えてぼんやりとしていた。

体育の授業にも全く身が入らない。

更衣室に戻って着がえている今も、心ここにあらずといった表情で視線を宙にさまよわせている。

（やっぱり……お姉さまの指でしていただかないと……）

悶々とした身体で帰宅した奈々は、就寝前に自らの指で慰めた。発情しきっていたため、すぐに気をやっってしまう。

何度となく女の喜びを極めた。

しかし、一向にモヤモヤが解消されないのだ。慰めても慰めても女陰のうずきが収まらない。

とうとう、自慰をしながら眠ってしまった。自身の指を股間にやっただけ意識を失ってしまったのだ。

（もしかして……お姉さまにしていただけかかないと満足できない身体になっちゃったのかな……）

ブラウスを着ただけの格好で、奈々は頬を紅潮させていた。白いブラウスの裾から太腿をあらわにしたまま、お姉さまへの想いにひたる。

お姉さまのことを思い描くと、ひとりでに身体が熱くなり、股間の中心部がうずうずとしてくる。

いけない妄想にふけっていると、不意に後ろから声をかけられた。

「奈々さん、どうなさったのですか？ ぼんやりとなさって」

声の主は桐原鈴音さんきりはらすずね。

奈々の親友にして、よき相談相手である。

真横に切りそろえられた前髪といい、色白の肌といい、日本人形さながらの美少女だ。セミロングの黒髪は、武道のさまたげにならないようにとの配慮から無造作に束ねられている。清らかな美貌には、穏やかながら凜とした表情を浮かべていた。

「あ、鈴音さん……。ちよつとお姉さまのことを考えていて……」

「百合さまのことを？　けんかでもなさったのですか？」

「そういうわけではないんだけど……」

奈々は、声をひそめて昨日の出来事を話す。

「そうだったのですか……」

鈴音さんは、ほんのりと頬を桜色に染めながら奈々の話に聞き入っていた。

鈴音さんもお姉さまを持つ身である。奈々が百合さまの妹になってからほどなくして、鈴音さんは部活動の上級生と契りを交わしたのだ。

鈴音さんのお姉さまは、なぎなた部の亜里紗ありささま。奈々の相談にも乗っていただいたことがあり、また、『実技指導』までしていただいた方だ。

「私も実は……お姉さまに躰たてけをしていただいて……」

「え？　鈴音さんも？」

「こんなことをお話しするのはいかかと思うのですが……他ならぬ奈々さんですから……」

清楚な美貌を赤らめながら、鈴音さんはゆっくりと話し始めた。
亜里紗さまの躰けを……。

「まいりました……お姉さま」

袴姿の鈴音は、お姉さまに深々と一礼した。
まだかすかに息が乱れている。

「上出来よ。私から一本を取ったのだから」

お姉さまも、かすかにお顔を上気させていた。

鈴音の姉・朝比奈^{あさひな}亜里紗さま。

ワインレッドの髪をツインテールにしている。その身体は、同世代の女の子たちの中でも特に肉感的だ。胸元は大きくふくらんでいるし、ウエストは美しくくびれている。

「私の妹ながら、素晴らしい上達ぶりよ」

なぎなた部の活動を終えた後に手合わせをするのが、鈴音たち姉妹の習慣になっていた。
お姉さまからお褒めの言葉をいただき、鈴音の胸は喜びと誇らしさに満たされる。

「でも……敗れたことには変わりないわ」

お姉さまの笑みが淫らなぬめりを帯びた。

「手合わせに敗れた女の子がどんなはずかしめに遭うのか……わかっているわよね？」

「は……はい……」

これからなされるであろう甘美なはずかしめを思い、鈴音は身体を火照らせてしまふ。なぎなた部の部室に連れ込まれた。

道具が雑然と置かれたこの空間で、手合わせに敗れた鈴音は甘いはずかしめを受けるのだ。

両手首を前手に縛られただけで、股間の底部に息づく女陰がむずがりだす。棚の脇から突き出た鉤に、両手首を吊るされた。

「ふふふ……。鈴音の身体、見せて……」

しなやかな指で腰の帯を解かれ、袴がすべり落ちる。清楚な白い下着を穿いた股間があらわになった。

胴着をはだけられ、小ぶりの乳房がさらけ出される。薄桃色の乳首は、あからさまに尖り立っていた。

「お姉さま……」

手合わせの後の火照りは引いたはずなのに、恥ずかしさと興奮で身体は再び熱くなる。

「じつくりと可愛がつてあげるわ。じれて泣き出すくらいに……」

お姉さまは、ご自身のツインテールに手をやった。髪房の先を筆のように持ち、鈴音の乳首を毛先でそつとこする。

「ひあんっ」

普段から冷静沈着を心がけている鈴音だが、お姉さまの毛先にくすぐられて、可愛らしい悲鳴を上げてしまった。

「んうう……んんっ……んううう……」

ツインテールの穂先が乳首をかすめるたび、鈴音はかぶりを振る。

お姉さまとの淫戯を期待してふくらんでいた乳首は、髪の毛先にくすぐられて快感に悶えた。しかしその快感はあまりにもじれったく、たまらないほどにもどかしい。

もつと直接的な愛撫をおねだりして、薄桃色の蕾はさらに身をふくらませた。

吸ってくださいとばかりに。

しごき上げてくださいとばかりに。

鈴音のはしたない肉体反応をご覧になって、お姉さまは蠱惑的な笑みを浮かべる。

「何かお願いしたいことがあるんじゃないの？」

しかし鈴音は唇を結んだまま。

大和撫子の気質を持つ鈴音は、自分からおねだりすることが今でも恥ずかしいのだ。

「ふふふ……。でも、身体は正直ね」

「ひあああ……。んううう……。んううう……」

左右の乳首を同時にくすぐられると、吊るされた身体を右に左にとくねらせずにはいら

れない。

唇は何とか結ぶことはできても、下着の中では秘めやかな唇がゆるんでいた。

しかも、下着の中の秘唇はふしだらな蜜をもらしている。おねだりができない上の唇に代わって、股間の唇がおねだりの涎を滴らせているかのようだ。

熱い女汁がとろとろともれ出し、股布の二重底部分に濡れ染みができてしまう。

「おしとやかで清楚な大和撫子が、こんなにも淫らにあそこを潤ませているなんて……。他のみんなには想像もできないでしょうね」

「い、言わないでください……お姉さま……」

はしたない自分を恥じて、肉体の高ぶりを鎮めようとするのだが、お姉さまの髪でさわさわとくすぐられると、どうしてもお汁がもれてしまう。

「こつちを直に可愛がつてあげたら、かたくなな鈴音も素直におねだりができるようになるかしら？」

お姉さまの指が下着にかかった。

ゆつくりと剥き下ろされてゆく。

「ああ……」

恥じらいに啼く鈴音。

乙女として最も秘めておきたい肌が、少しずつさらけ出される。じれったいほどにゆつ

くりと剥き下ろされ、いつ果てるとも知れない恥辱に悶えていた。

「ふふふ……見えてきた見えてきた」

ふつくらとした女肉門は、童女さながらの無毛である。淡いながらも生えていた性毛は、お姉さまの手で残らず刈り尽くされていた。

女肉門の剃毛は、姉が妹にする最初の躰けだとか。

下着をずり下ろされ、無毛の女陰をあばかれただけでさえ、鈴音にとってはとてもなく恥ずかしい。

しかも、その女陰の花びらは左右に咲きめくれ、喜びの蜜を滴らせているのだ。

（ああああ……お姉さま……。恥ずかしいです……）

武道に精進し、常におのれへ禁欲を課してきた鈴音だが、女陰はふしだらに咲き乱れていた。厳しい禁欲の反動が全て女陰にあらわれたかのように、たっぷりの女汁に潤んでいる。

「汗とお汁が入り混じって、とってもいい匂いよ」

濡れそぼった女陰をお姉さまに嗅がれ、さらに羞恥心を刺激された。

しかし、他ならぬお姉さまに秘めやかな臭気を嗅がれたかと思うと、羞恥心のみならず性的な興奮もをかき立てられてしまう。

「鈴音の最も弱いところ、はずかしめてあげる……」

お姉さまは、二本のツインテールを筆のごとく操って、無毛の女陰をこすりまわした。

「んううう……んうう……あつ……ああん……」

結んでいた唇はほどけ、歓喜の声がもれる。

咲きほころんだ女陰をツインテールの穂先でくすぐられ、めくるめく快感をかなでられた。

めくれ返った姫花びらの間を、二つの穂先が躍りまわる。

お姉さまに初めてを捧げた女肉穴。

おしっこの穴。

そして、すっかり包皮から剥け出た陰核。

女陰の中でも特に感じやすいところを、髪の毛の穂先二つで翻弄される。

「あああ……あひっ……。お、お姉さま……」

女肉穴の縁をこすられ、吊るされた女体を左右によじった。喜びのあまり女肉穴はひくひくと収縮し、喜びの汁を滴らせる。

「ひいひい……ひっ……あひいひい……」

おしっこの穴に穂先を差し込まれ、小さくかきまわされた。むずむずという刺激とともに尿意をかき立てられる。

「お、おしっこ……もれちゃいます……」

失禁すまいとしてそこに意識を集中すると、ますます穂先の蠢きを感じ取ってしまう。

おしつこ穴をかきまわされ、尿意とともに、むずがゆいようなくすぐったさを味わわされた。白い下着が絡みついた脚は、内股になって細かにわなないている。

そして、剥き出しの女芯をこすられると……。

「んあああ……あひつ……ああん……。そこ……。そこは弱いんです……。あん……。あんつ……」

恥じらいも忘れてよがり啼いてしまう。

大きな声を出せば外にもれるとわかつてはいるのに、歓喜の声を抑えることができない。小さくも感じやすい肉蕾は、この上ない快感に悶えていた。

意識が遠のくほどの快樂が、ごく小さな肉蕾に響き渡っているのだ。あまりにも大きな快樂を処理しきれずに、鈴音は啼き叫びながら身をもがさせる。

「お姉さま……お姉さまあ……。あん……。ああん……。んあああ……」

薄暗い部屋に甘い啼き声が響く。

吊るされた鈴音が着けているのは、はだけられた胴着と、膝までずり下ろされた下着だけ。清楚な武道美少女が、袴を剥かれて、胴着をはだけられて、吊るされた女体をくねらせている。

扇情的かつ倒錯的なその姿は、責め絵の題材にでもなりそうだ。

「この光景、私だけが独占するなんて、もったいないわね。誰かに見せてあげたいわ……」

「ひいひい……。お許しを……。お許してください、お姉さま……。ああ……。ひいつ……。あひん……」

甘美な旋律をかなでられて、鈴音はふしだらに乱れてしまう。

女陰の三カ所を代わる代わるに責められた。時には執拗に、時にはかすめるようなやわらかさで。

女芯はぴんぴんに身をふくらませ、女肉穴は小刻みな収縮とともに蜜の涙を流す。お姉さまのツインテールに翻弄されて、鈴音はいいようによがり啼かされていた。

「ひいひい……。ああ……。んああああ……。」

もはや鈴音は、清楚な武道少女ではない。

お姉さまのツインテールに弄ばれ、ふしだらな牝となっていた。

袴を剥かれただけでなく、牝に剥き上げられたのだ。

鈴音にとって、お姉さまのツインテールは淫らな触手である。淫靡な蠢きで鈴音を責め立て、快楽と恥辱をもたらすのだ。

「んああ……。お姉さま……。ああ……。あんっ……」

吊るされた身体をくねらせながら、鈴音はお姉さまの触手によがり悶えていた。

ここは貞聖女子学園の生徒会室。

奈々と鈴音さんは、互いに顔を見合わせながら身を縮めていた。

「奈々さん……。私たち……。どうしてこんなことに……」

「ううう……。鈴音さん……」

二人とも恥ずかしい格好をしている。

上半身に着けているのは、髪を縛るリボンと体育シャツ。

ブラジャーは着けていないため、体育シャツには乳房の丸みがはっきりと浮き出ていた。鈴音さんの小ぶりな美乳……。

奈々のたわわな豊乳……。

ふくらみ具合のみならず、頂に息づく乳首の尖りようまでがあらわになっていた。

下半身に着けているのはソックスと上履きだけ。尻肉の丸みも、股間に刻まれた割れ目も、余すことなくさらけ出されている。

体育シャツを着ただけの下半身裸で立たされているのだ。

手は太腿の脇。

気を付けの姿勢である。

手を拘束されているわけではないので、隠そうと思えば隠せないことはない。

しかし奈々たちにはそれができなかった。

奈々も鈴音さんも、見えざる鎖によって手を拘束されているのだ。お姉さまの命令とい

う見えざる鎖で。

手のひらを股間にやることもできず、体育シャツの裾を引っ張り下ろすこともできず、秘めやかな花肉をあらわにしていた。

(あそこ……隠したい……。でも……)

奈々は幼顔をほんのりと赤らめる。

恥部を隠せるのにそれをさらけ出しているというのは、女の子にとっては余計に恥ずかしい。

「二人とも、とても可愛らしいわよ」

そうおっしゃったのは白姫百合さま。

生徒会の会長にして、一年生たちの憧れの的。奈々のお姉さまである。

お姉さまはゆったりと椅子に腰かけて、下半身裸の下級生二人を眺めていた。

気品のただよう美貌に浮かんでいるのはいつも通りの優美な微笑だが、その瞳に宿る光は淫らなぬめりを帯びている。

「下半身裸の女の子が二人並んでいるのって、言いようのない倒錯美があるわ」

舐めずるような眼差しで少女二人の下半身をご覧になっていた。

「妹の自慢会をしようと持ちかけられた時、どうしようかと迷ったけれど、やってみて正解だったわ」

お姉さまは、隣に座っている亜里紗さまの方へちらりと目を向ける。

朝比奈亜里紗さま。

なぎなた部で最も腕の立つお方で、鈴音さんのお姉さまだ。

トレードマークともいえるツインテールを指先で弄びながら、蠱惑的な視線を奈々の女陰に這わせている。

「私が奈々ちゃんのあるところを見たことがあるのに、百合が鈴音のを見たことないのは不公平でしょ」

かつて奈々は、亜里紗さまに悩みを相談したことがあった。百合さまとのことを相談していたはずだったが、いつの間にか身体の悩み相談になっており、あそこを品定めされてしまったのだ。

「久しぶりに奈々ちゃん天然無毛のあるところを見たいっていうのもあるけれど……」

亜里紗さまはそうおっしゃって、くすくすとお笑いになる。

お姉さまと亜里紗さまとは、幼い頃からの親友同士。お二人とも妹を持つ身となったので、互いの妹を披露しあおうということになった。

奈々は、女の喜びを教えていただいた上級生に再び女陰を見られ、恥ずかしさに幼顔を赤らめている。

鈴音さんも凜とした顔を紅潮させていた。姉以外の上級生に女唇を見られて、羞恥を覚

えているのだろう。

上級生のお二方は、恥じらいに悶える下級生たちをご覧になって、心から楽しんでいらっしゃる様子だ。

「奈々ちゃんのアそこ、やっぱりつるつるのぷにぷにで可愛いわ」

「ふふふ……。亜里紗に褒めてもらって、奈々も喜んでるわ」

お姉さまは、微笑とともにちらりと妹の方を見やる。

（よ、喜んでなんかいません……）

「その証拠に、ほら……乳首があんなに尖っている」

豊かな乳房によって張りつめているシャツには、はしたなく尖り立った乳首がくつきりと浮き出していた。

奈々は、湯気が出そうなほどに顔を赤らめる。

「でも、前とくらべて、少し花びらがはみ出てきたんじゃない？」

「私が毎日のように愛いっくしんできたからかしら」

女唇のことをあれやこれやと品評され、奈々は恥ずかしさに身を灼かれていた。

（あそこ……見られちゃってる……。品定めされちゃってるよ……）

幼顔を紅潮させつつ、太腿同士をもじもじとこすり合わせる。

上半身に着た体育シャツが、剥き出しの下半身を引き立てていた。産毛すら生えていな

い股間にお二人の視線が這いずりまわるのを感じ、恥ずかしさのみならず秘めやかな興奮をも味わってしまう。

「鈴音さんのあそこ、やはり亜里紗が剃っているの？」

「そうよ。三日おきくらいにね」

「うらやましいわ。剃毛する楽しみがあつて」

「奈々ちゃんのおそこだって、剃り痕が全くなくて、とっても可愛らしいじゃない。鈴音にも永久脱毛をさせようかしら……」

亜里紗さまのお言葉に、鈴音さんはびくんと身体を震わせた。

「奈々、鈴音さん。今度は、中身も見せてちょうだい」

妹二人は互いに顔を見合わせる。

それぞれのお姉さまの前ではいつもやらされていることだが、他の人を前にしてするのはやはりためらわれた。

「できないのなら、その格好で校舎内を引きまわしてもいいのよ」

そうおっしゃって、お姉さまは鎖付きの首輪をちらつかせる。

「鈴音と奈々ちゃん、どちらか遅かった方を引きまわし刑にしましょうか」

亜里紗さまのお言葉に、妹二人はあわてて股間に手をやった。女陰門に左右から人差し指をあてがい、ゆつくりと割りくつろげる。

女陰門を両手で開陳したのは、そのように舐けられたからだ。両手を使って広げることによって、「あらがうことなく捧げる」という意思を示すのだとか。

また、ただ割り広げるだけでなく、丁寧な言葉づかいでの口上も求められている。

「亜里紗さま……お姉さま……。どうか奈々のあそこを……ご覧ください……」

「百合さま……お姉さま……。鈴音のあそこ……存分にご検分くださいませ……」

女の子として最も秘めておきたいところを開帳しながら、うやうやしい言葉で品定めをお願いしなければならないのだ。

体育シャツを着ただけの恥ずかしい格好で、股間をわずかに前へせり出させ、両手で股間を割り広げている。

下半身裸で立ち放尿をしているかのようだ。

奈々も鈴音も、恥じらいに瞳を潤ませながら顔をうつむかせている。女の子にとってこの上なく恥ずかしい姿勢で、女性器の品定めを待っていた。

「では……鈴音さんのあそこ、試させてもらうわね」

優雅かつ淫靡な微笑を浮かべながら、鈴音の女肉穴に中指を突きつける。

「心ゆくまでどうぞ」

答えたのは亜里紗さま。

お姉さまは、しなやかな中指で女肉穴をえぐり上げる。

「んああああああ……」

秘めやかな肉穴を貫かれて、鈴音さんは身体をびくんと引きつらせた。脚をわななかせる。「ふふふ……。やはり奈々とは微妙に吸いつきが違うわね」

妹との違いを確かめるように、お姉さまは中指を抜き差しした。やさしく、ねっとり……。

「んああ……。ああ……。百合さま……。んああ……」

武道で足腰を鍛錬しているはずの鈴音さんも、お姉さまの指づかいに官能をかなでられて、脚を細かに震わせていた。

「鈴音ったら……。百合の指であんなに乱れちゃって……」

亜里紗さまは妹の乱れ姿に微笑している。

「ならば私も、奈々ちゃんを楽しませてもらうわ」

ツインテールの上級生は、無毛の女唇に顔を寄せた。割り広げられた女陰門の内側を、中指でなぞり上げる。

「あひい……」

軽くなぞられただけなのに、奈々は大げさな嬌声きようせいを上げてしまう。

「あそこを広げている指を離したら……。あそこ丸出しで引きまわしの刑よ」

そう釘を刺しておいてから、亜里紗さまは手のひらを上に向けて、中指の先で女肉穴を

かきまわした。

じっくりといたぶってから、汁に潤んだ女肉穴をえぐり上げる。

「んううう……んん……」

お姉さまの前でふしだらな声を上げまいとして、奈々はきつく唇を結んだ。

その様子を蠱惑的な上目づかいで見ている亜里紗さまは、どうあっても奈々をよがり啼かせるおつもりらしい。

「百合の前で、たつぷりと啼かせてあげるね」

粘つくように淫靡な指づかいで抜き差しした。

秘めやかな粘膜を押し広げられ、こすり上げられ、女の喜びをかなでられる。

「んうう……んああ……ああ……あんっ……」

亜里紗さまの指づかいに屈して、ふしだらな喘ぎをもらしてしまう。

女肉穴は歓喜に悶えて、きゆうきゆうと収縮した。発情の蜜汁を滴らせながら上級生の指を貪欲に喰い締める。

「ねえ、奈々ちゃん。私の指づかいと百合の指づかい、どっちが気持ちいい？」

巧みな蠢きで女肉穴を指姦しつつ、亜里紗さまはお尋ねになった。

「あひっ……あんっ……ああん……。お、お姉さまの方が……いいです……」

お姉さまへの貞節から何とかそう答えた奈々だが、声は喜びにうわずってしまふ。

しかも、奈々の女体は、言葉の内容とは裏腹の反応をしているのだ。

体育シャツに浮き出た乳首はぴんぴんにふくらんでおり、愛撫をおねだりしている。女肉穴は嬉し泣きをして、熱い蜜涙を流していた。

「身体やあそこの唇は素直なのに。上のお口も素直にしてあげるわ……」
剥き身の女芯に親指をあてがわれて、細かにこすり上げられる。

「ひいっ……あひい……ああん……ああん……。あ、亜里紗さま……お許してください……そこは……んあああ……」

我を失った奈々は、はばかりことなくよがり啼いた。
性的興奮でふくらみきっていた女芯を直にこすられ、揉みこねられ、腰がとろけるほどの快楽を響かされる。

しかも女肉穴をこすり上げられているのだ。

女肉穴でかなでられる快感と、女芯に響き渡る歓喜。

二つの歓喜が共鳴して、めくるめく快楽となる。

「んあああ……あああああああ……」

長く尾を引く嬌声とともに奈々は女の喜びを極めた。脚からは力が抜け、ずるずると座り込んでしまう。

（あああ……私ったら……お姉さまの前で……）

おのれの淫らさに恥じ入りながらも、奈々は陶然とした表情で歓喜の余韻にひたっている。

閉じることを忘れた太腿の付け根では、無毛の女陰がひくひくと蠢いて女汁を滴らせていた。

（お姉さま……申し訳ありません……。わたし……亜里紗さまにいたずらされて……）
奈々は自分を責めていた。

お姉さま以外の上級生に弄ばれて、こともあろうに女の喜びを極めてしまったのだ。体育シャツを着ただけの姿で、ぐったりとして床に座り込んでいる。

性的絶頂に打ちのめされた身体からは力が抜けきっており、太腿を閉じ合わせることさえままならない。しどけなくゆるんだ太腿の付け根では、割れほころんだ女陰門が喜悦の女汁を滴らせている。

奈々の女陰門は産毛すら生えておらず、童女さながらの幼い姿をしていた。

しかし、無毛の肉饅頭に刻まれた縦割れは左右にゆるんでおり、薄桃色の花びらはめくれ返っている。

お姉さまの指で封印を解かれた膣穴は、ひくひくと収縮して蜜をもらしていた。

「あらあら、奈々も氣をやってしまったのね」

あでやかに微笑するお姉さまの足元には、同じく氣をやらされた鈴音さんが陶然とした

顔で座り込んでいる。

上級生お二方は、妹の自慢会を心から楽しんでるご様子だ。

「奈々、お行儀よくしていられたかしら？　鈴音さんは、気をやる瞬間まで礼儀正しくあそこを開陳していたわよ」

お姉さまは、体育シャツを着ただけの下級生二人を、笑みとともに見つめている。

亜里紗さまにいたっては、指に付着した奈々の蜜汁を、これ見よがしに舐めていた。

「奈々ちゃんのおそこ、私の指をとっても喜んでくれたわよ。私の指が蜜まみれになるくらいに……」

「それは鈴音さんも同じ。楚々^{そそ}とした立ち居振る舞いが嘘のようによがり乱れていたわ」

お姉さまも亜里紗さまも友人同士。

ご自分の妹が友人の指でよがり悶えているのを横目に見ながら、友人の妹の女唇を品定めしたのだ。

品定め果てに気をやるという牝恥をかかされた妹二人は、ある種の倒錯的な喜びを覚えていた。

お姉さまの命令で他人に身をゆだねたということは、取りも直さず、お姉さまのものであることの証明なのだ。お姉さまの前で女陰を品定めされ、背徳の快感を味わわされてしまう。

「あそこの吸いつきぶりはわかったから、今度は口唇奉仕の躰け具合を見せてもらいましょうか」

お姉さまは、ゆつたりと椅子にかけたまま、自らの手でスカートをまくり上げた。

信じられないことに、お姉さまは股間に何も穿いていらつしやらない。スカートの中で女陰を剥き出しにしたまま、鈴音さんの女陰をなぶり抜いていらしたのだ。

大きく太腿を開いて、下級生二人に秘めやかな器官をさらけ出す。

（あああ……お姉さまのあそこ……）

何度も目にしたはずなのに、奈々は思わず崇拜の眼差しで見入っていた。

鈴音さんも、初めて見るお姉さまの女花肉に魅入っている。

お姉さまの女唇は、黒々とした陰毛におおわれていた。女肉門の合わせ目からは、紅色の花弁が咲きめくれている。

優美かつ官能的なその姿は、咲き誇る薔薇を思わせた。

「下級生二人を這いつくばらせて、あそこをしゃぶらせてみたかったの」

濡れ滴る女花肉を下級生に見せつけながら、お姉さまは気品あふれる美貌に嗜虐の微笑を浮かべる。

「二人とも。私のあそこを吸ってちょうだい」

そう命じるお姉さまはどこまでも美しい。

近づきたいまでに高貴で優美なお顔と、魅入られずにいられないほどに官能的で淫靡な女陰花。

気高さと淫奔さとの対比が、お姉さまをより一層のこと魅力的にしている。

「奈々。鈴音さんよりも舌づかいがたなかつたらお仕置きよ」

「精一杯つとめますから……」

奈々は四つん這いになり、お姉さまの女陰に唇を捧げた。女陰そのものを崇めているかのようなうやうやしきで口づけし、むしゃぶりつく。

「それから鈴音さん。口唇奉仕をおろそかにしたら、あなたのお姉さまにお仕置きをしてもらうわよ」

それを聞いた鈴音さんは、びくんと身を震わせた。

「あなたのお姉さまにするように、私のあそこに奉仕するのよ。つたない奉仕をすれば、それを教育した姉が恥をかくのだから、しっかりとね」

「は、はい……。ふつつか者ですが、どうぞよろしくお願いいたします……」

鈴音さんも、体育シャツを着ただけの姿で四つん這いになる。下半身を丸出しにしたまま、上級生の女陰に口づけした。

亜里紗さまに仕込まれた舌づかいを、亜里紗さまがご覧になっている前で他の上級生に披露する。

犬のように這いつくばった下級生二人は、競いあうようにして一人の上級生の女陰にむしゃぶりついていていた。頬と頬を触れさせるだけでなく、舌同士をこすり合わせながら、口唇奉仕にいそしんでいる。

滴る女蜜を奪いあうかのように、二人して舌を差し込んだ。蜜壺の中で舌と舌をくねらせる。

「んうう……んああ……んん……」

お姉さまの唇がわずかにゆるみ、抑えがちな喘ぎをもらした。二人がかりでの舌奉仕を、お気に召してくださったようだ。

「お姉さま……お姉さま……」

奈々は、身体を高ぶらせながら女陰に奉仕する。お姉さまの蜜汁を味わい、その匂いを嗅ぐだけで、奈々の肉体は熱く火照るのだ。

もっとお姉さまに喜んでいただきたくて、奈々は女芯に吸いついた。舌で舐め上げ、ねぶりまわす。

「んあ……あああ……」

たおやかな喘ぎ声が聞こえる。

お姉さまにその声を上げさせたのが自分であると思うと、奈々は喜びに満たされた。お姉さまの官能をかなでるべく、ますますのうやうやしきで吸いむしゃぶる。

鈴音さんも、じゅるじゅると音を立てて蜜汁をすすっていた。女肉壺に差し込んだ舌をしきりと蠢かせ、蜜汁をおねだりしているのだ。

お姉さまは椅子の背もたれに身をあずけて脚を大きく広げ、下級生二人の口唇奉仕を味わっていた。這いつくばって女陰にむしゃぶりつく奈々と鈴音さんを、嗜虐の香りがする微笑を浮かべながら見下ろしていた。

下半身裸で四つん這いになっている二人の少女を、亜里紗さまは背後からご覧になっている。剥き出しの尻肉が並んでいるのを、蠱惑的な眼差しで観賞していた。

「私も一度でいいからやってみたかったのよね。二人の女の子を這いつくばらせて、代わるに犯すっていうのを……」

ちらりと後ろを見やった奈々の目に映ったのは、スカートをまくり上げた亜里紗さま。

亜里紗さまの股間には、まがまがしい男性器がそそり立っている。

「ひいっ……」

黒光りする男性器が生身のものでないことは、一瞬の後にわかった。黒革の帯を組み合わせたような下着を亜里紗さまは穿いており、女陰に喰い込む縦帯から模擬男根が生えているのだ。

本物でないとはいえ、それは魁偉かいゐな姿をしていた。胴部はごつごつと節くれ立ち、亀頭は不気味に笠を張り出させている。

「どう？ 私のものは？」

小悪魔の尻尾を思わせるツインテールと、蠱惑的な美しさのお顔。女性らしくふくらんだ胸元と、股間にそびえる逞たくましい男性器。

そのお姿は、物語に出てくる女夢魔を思わせる。女夢魔には男性器など生えていないはずだが、男性器をそそり立たせている亜里紗さまを見ると、なぜかそんな連想をしてしまうのだ。

「ふふふ……。どっちから犯してあげようかな」

亜里紗さまは、まくり上げたスカートをヘアピンで留め、見せつけるかのように張形をしごき上げた。

「よそ見をしている奈々から犯してあげて」

お姉さまから間接的な叱責しっせきをされ、奈々はあわてて口唇奉仕に戻る。

（も……申し訳ありません、お姉さま……。もうよそ見などしませんから……）

これまでよりもさらに熱を込めて、お姉さまの女陰にお仕えした。ぷつくりとふくらんで奉仕を要求している女芯に口づけし、鼻を鳴らしながらむしゃぶり吸う。

だが亜里紗さまは、最初の獲物として奈々をお選びになったようだ。

尻肉を両手でつかまれ、そそり立つ男性器で女陰の割れ目をこすり上げられる。

「あひい……」

四つん這いの奈々は、びくんと身体を引きつらせた。女肉門の浅い部分を繰り返しなぞられ、再び官能をかき立てられてしまう。

亜里紗さまの品定めによる絶頂はいまだに尾を引いており、お姉さまへの口唇奉仕とも相まって、女体は発情の微熱を帯び続けていた。うずうずとしていた女果実をこすられると、新たな果汁がもれ滴ってしまう。

「こういうの、百合はあまり使わないでしょ。たつぷりと楽しんでね」
割れほころんだ女陰を一気に貫かれた。

「んああああああ……」

太く逞しい男性器で、濡れそぼった女肉穴をえぐり上げられる。

指でされた時には経験したことがないほどの荒々しさでこすり上げられ、押し広げられ、奈々は大きな声で啼き叫んだ。

「どう？ 逞しいペニスのお味は？」

亜里紗さまは、貪るように力強い腰づかいで奈々を犯す。

「んあああつ、ああつ、あんっ……」

男性器を打ち込まれるたびに官能の炎が噴き上がった。男性器ならではの激しい快楽を味わわれる。

亜里紗さまの腰ふりに合わせて奈々はよがり声をかなでてしまった。

「鈴音も、こうしてあげると可愛い声で啼くのよ」

奈々の隣で這いつくばっている鈴音さんも、くぐもった喘ぎをもらしている。どうやら亜里紗さまの指で女陰穴をかきまわされているらしい。

「奈々。あなたも鈴音さんを見習って、奉仕に励みなさい」

ポニーテールの根本をつかまれ、お姉さまの股間へと顔を埋めさせられた。

「んうっ……んううう……んん……」

女陰でかなでられる快感に駆り立てられるようにして、奈々はお姉さまの姫花肉を情熱的に吸い貪る。

「そうよ……。張形に犯されたくらいで奉仕をおろそかにするようでは、一人前の淑女とは言えないわ」

亜里紗さまは、口唇奉仕ができないくらいに奈々をよがり悶えさせようとして、腰づかいに一層の淫らさを込めた。

片方の手で鈴音さんの女陰をいたぶりつつ、空いた手を奈々の股間に這い込ませる。男根に押し広げられた無毛秘唇をまさぐり、陰核を揉みこねた。

（あああ……あひっ……ああん……。亜里紗さま……。そこは弱いんです……。んあああ……あんっ……）

太腿から力が抜けそうになる。

女肉穴と感じやすい蕾とを同時に責め立てられ、奈々は女の喜びに悶えた。

「んうう……あああ……お姉さま……んう……」

お姉さまの姫花にお仕えしようとするのだが、亜里紗さまの巧みな腰づかいで犯されると、ついつい舌の動きが緩慢になってしまう。

「どうしたの、奈々？ いきそうなのかしら？」

お姉さまを見上げる奈々の瞳は、歓喜のために靄がかかっていた。

潤んだ瞳に映るお姉さまは美の女神を思わせる。

そのお顔は気高く美しい。

また、股間に息づく姫花は、女の淫らさを体現しているかのように咲き乱れている。

「もし私よりも先に氣をやったら……躑けをし直すわよ。今までの躑けが幼稚園のお遊戯に思えるくらいに厳しく仕込んであげるわ」

神話に出てくる女神は、時には残酷な仕打ちをするものだ。

女神のように気高いお姉さまもまた同じである。

（そ……そんな……。もつと厳しい躑けなんて……）

奈々はおののきに見舞われた。

恐ろしさもさることながら、お姉さまに手ずから恥辱の躑けをしていただけるかと思うと、秘めやかな興奮に胸が高鳴るのだ。

お仕置きへの恐怖と、ひそかな高ぶりとに突き動かされ、奈々はお姉さまの女陰にむしやぶりついた。

「まあ、怖いお姉さまだこと」

からかうようにおっしゃったのは亜里紗さま。

「奈々ちゃんがかawaiiそうだわ」

そうおっしゃりつつも亜里紗さまは、さらなる荒々しきで男性器を打ち込み、一層の巧妙さで女芯を揉み転がし、奈々を歓喜の頂に導こうとする。

（あひっ……あああ……ああん……。あ、亜里紗さま……。そんなにされたら……。んあああ……いっちゃいます……）

奈々は這いつくばったまま快楽に悶えていた。

奉仕のためにより啼きできない唇に代わって、女陰穴が嬉し泣きをする。きゅうきゅうという収縮で男性器を喰い締め、歓喜の涙を流した。

あまりの快感に喘ぎをもらしながらも、お姉さまの姫花肉にむしやぶりつき、舌と唇を捧げる。鈴音さんの舌とせめぎ合うようにして女蜜壺をかきまわしたり、代わる代わるに女芯をついばんだりした。

「はあ……んっ……んあ……」

心なしか、お姉さまの息づかいが乱れてくる。

ポニーテールの根本をしつかりとつかまれ、顔面に股間をすりつけられた。

お姉さまは、大きく脚を広げたまま股間をうねり舞わせて、奈々の顔面を犯しているのだ。秘めやかな花肉をこすりつけて、快楽を貪っている。

下級生二人の顔は自慰の道具におとしめられていた。奈々の幼顔も鈴音さんのお顔も、蜜まみれにされてしまう。

「んうう……あああ……んはああああ……」

たおやかな喘ぎとともにお姉さまは身を引きつらせた。

女の喜びを極め、果ててしまわれたのだ。

「百合ったら、もういっちゃったの？」

亜里紗さまはくすくすとお笑いになる。

「二人がかりでこんなに熱心な奉仕をされたら、亜里紗だってすぐに気をやってしまうはずよ」

「お仕置きをされる奈々ちゃんが見られなかったのは残念だけど、いくときの啼き声はたっぷりと楽しませてもらうわ」

亜里紗さまは、とどめとばかりに腰づかいを激しくした。

たくましい男性器で奈々の姫花肉をえぐり上げ、指を淫靡に蠢かせて女蕾をいたぶり抜く。

「ひいひい……あひっ……んああ……。亜里紗さまああ……」

けだものさながらの荒々しい打ち込みと、女の肉体を知り尽くした指づかいに責められ、奈々はふしだらな声を上げてしまう。

そのすぐ横では、鈴音さんが牝犬のようによがり啼いていた。

「あひいひい……。お、お姉さまっ……。お尻はお許してください……」

中指で女陰穴を犯されるとともに、同じ手の親指で尻穴のすぼまりをえぐられているのだ。

「奈々さんたちの前ではなさらないで……。ひっ、ひいひい、あひいひい……」

感じやすい肉穴と背徳のすぼまりとを同時に責められ、しとやかな鈴音さんも淫らにより乱れている。

美しい上級生に犯されて、二人の少女は官能の喜びに翻弄されていた。

「お、お姉さま……。わたし、いっちゃんいます……。亜里紗さまに犯されて……。ああん……あひん……。んああああああ……」

まがまがしい姿をした男性器に秘めやかな肉穴をえぐり上げられ、沸き返る官能を抑えきれなくなる。

抑え込まれていた快楽が勢いよく噴き上がり、奈々の意識は高く高く舞い上がった。歡喜の頂へと追いやられたのだ。

お姉さまがご覧になっっている前で。

「お尻は……お尻だけは……。ひっ……。ひああああ……。…」

鈴音さんも、お尻でかなでられる快楽に屈して、気をやらされてしまう。清らかな武道少女の鈴音さんだが、気をやってしまうほどにお尻を性感開発されていたのだ。

牝恥をかかされた二人の下級生は、体育シャツを身につけただけの姿で床に座り込んでしまう。

しかし、ゆつくりと歓喜の余韻にひたることなど、妹たちに許されようはずもない。

「二人とも、私はまだ満足していないわよ」

ポニーテールの根本をお姉さまに引っ張り上げられた。

「は……。はい……。お姉さま……。…」

「失礼いたしました……。すぐにご奉仕いたします……。…」

奈々も鈴音さんも、力が入らない身体で四つん這いになり、唾液と女汁にぬらついた姫花肉に唇を捧げる。

ちゅくちゅくという舐め音をさせながら、陶醉の顔つきで上級生の女陰に奉仕した。

「私もまだ犯し足りていないのよね」

亜里紗さまは、目の前に捧げられた二つの尻肉を見下ろして舌なめずりをしている。這いつくばった少女二人を、魁偉な男性器で代わる代わるに貪り犯した。

「んうう……んんっ……んああ……」

「あああっ……んうう……んうう……」

剥き出しの下半身を荒々しく犯されて、奈々は女の喜びに悶える。

身体の芯まで官能の音色を響かされながらも、崇めるかのようなうやうやしさでお姉さまの姫花肉に唇を捧げていた……。

二次元ぷち文庫

奈々の学園ライフ外伝

著者

岡下誠

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル

編集部 TEL03-3551-6147 / FAX03-3551-6146

販売部 TEL03-3555-3431 / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©Makoto Okashita 2019

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『奈々の学園ライフ外伝』に基づいて作成しております。

<http://ktcom.jp/>

